

りました。

東京も次第に食料難になり、当時、国民学校五年生だった私は運動場を畑にし、さつまいもを植えたり、菜っ葉をつくったり、勉強どころではありません。兵隊さんに慰問袋をつくり、街角に立って千人針を頼んだり、銃後の婦人、子どもたちは「欲しがりません勝つまでは」を合言葉に、とにかく天皇陛下に命を捧げて頑張りました。

日本軍も初めは、連戦連勝で「大日本帝国陸海軍は……」というラジオ放送を楽しみに頑張ったものです。しかし、ノートが無い、鉛筆も無い、ズック靴はすり切れたものを履きました。母親の着物を縫い直してモンペ、防空頭巾、救急袋に、また、母の着物は物々交換で食料に替わるありさまです。何もかも、配給でしか

手に入りません。

昭和十八年だったと思います。東京でも疎開が始まりました。ようやく東京での生活にも慣れ、私が女学校に入学した年、我が家も疎開しなければならなくなり、母方の叔父のいる広島へ行くことになったのです。

東京と違い瀬戸内海の見えるよい所だからと、父も東京の仕事を退職して、叔父に準備してもらって着いた所は、南観音町の三菱造船所の社宅でした。そして私は、千田町の山中高等女学校に転校できました。

せっかく女学校に転校できたのに、英語はダメ、ドレミはダメという東京の女学校に通っていたため、本当に苦労しました。しかし、ゆっくり勉強どころではなくなり、やがて学徒動員です。

兵器廠、被服廠、食品廠、専売局

などに行きました。兵隊さんのボロボロになった軍服の修繕や兵器の修理です。私たちの場合、配給のたばこや食糧も、兵隊にはどんどん立派な物を送っていました。戦争に勝つためですから。

いよいよ戦局は厳しくなり、本土決戦のため、女性の私たちにも防空演習やなぎなたの訓練がありました。食べ物もろくに無い時代によく生きていたものだ、今では懐かしく思い出されます。気力で生きていたのでしよう。

昭和二十年八月六日、月曜日、朝から太陽が照りつける暑い日でした。弟も学童疎開から帰っており、私も何だかその日は出かける気にならず、休むつもりだったので。午前八時十五分、何か強い光りにびっ